

令和5年度学校評価総括表

斑鳩町立斑鳩中学校

教 育 目 標		「自ら学び 心豊かに たくましく生きる生徒の育成」 基礎的、基本的な知識・技能・態度を修得させるとともに、自ら判断し、問題をよりよく解決していく「生きる力」を身につけさせる。		総合評価	
教 育 方 針		「日本国憲法」・「教育基本法」の根本精神に基づき、奈良県教育委員会の指導方針を踏まえた本校の教育を推進する。 本校は、校区内に世界遺産の法隆寺、小倉百人一首にも詠まれている龍田川があり、平成29年度に創立70周年を迎えた歴史と伝統のある学校である。 聖徳太子の教えの『「和」の心を大切にし、ともに学び、ともに築こう。』を教育理念に掲げ、『チーム斑鳩 心一つに育み 支え つなぎ合う』のスローガンのもと、生徒も教職員も一つとなって、学習や行事、部活動などの学校生活のあらゆる場面において、いじめなどない調和のとれた学校となるように努めている。		B	
学校経営ビジョン		め ざ す 学 校 像	め ざ す 教 師 像	め ざ す 生 徒 像	
		○誰もが行きたくなる学校 ○授業を大切に作る学校 ○笑顔と挨拶が溢れる学校 ○地域に信頼される学校	○わかる・楽しい授業を工夫する教師 ○生徒に寄り添い、真剣に向き合う教師 ○謙虚に学び、自己を磨く教師	○自ら考え、意欲的に学ぶ生徒 ○互いに認め合い、支え合える生徒 ○ふるさと斑鳩を自慢できる生徒	
前 年 度 の 評 価 と 課 題			今 年 度 の 重 点 目 標		
学習面においては、授業状況調査の結果分析から、めあての提示は概ね達成されているが、振り返り活動をさらに充実させ、対話的な活動を積極的に行い、主体的な学びにつなげていくことが改善点としてあげられる。また、全国学力・学習状況調査の結果分析から、引き続き国語・数学の思考・伝達に特化した問題対策を講じて、本校生徒の苦手とする領域の向上をより図っていく。また、chromebookを通じて、教師と生徒のICT機器の活用をより活性化させていきたい。生活面においては、基本的生活習慣は概ね確立できているようであるが、積極的な挨拶や、場にふさわしい言葉遣いの大切さを理解させ、規範意識向上に向けた指導を展開していく。また、生徒の変容や不登校傾向の生徒に関わる内容を全体で共有し、一人でも多くの生徒が気持ちよく登校できることを目指していく。			1 学力の向上及び規律ある学習態度の充実を図る。 時間前行動を推進し、ICT機器を活用した授業を展開し、主体的・対話的な学びを生徒が実感できる授業改善に取り組み、充実した家庭学習を推奨していく。 2 規範意識を高め、挨拶の励行や適切な言葉遣い・行動ができる生徒を育てる。 挨拶の励行、正しい言葉遣いを推進し、ルールやマナーを守れる素地をつくる。 3 いじめを許さない学校づくりを推進する。 いじめ防止に努め生徒のSOS(変容)を見逃さず問題解決に向けて組織として、取り組む。		

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策・評価指標	評価			成果と課題(評価の分析)	課題の改善策等	学校関係者評価
学力の向上 基礎・基本 の定着	学習した知識を活用する学習方法を身につけさせる。	○ 生徒に基礎的・基本的な知識・技能を身に付けさせ、実生活の様々な場面において、活用・実践できるようにする。 ○ 生徒の学習習得状況に留意し、家庭学習を充実させ、必要に応じて学習の補充を行っていく。 ● 全国学力・学習状況調査で、平均正答率が県平均、全国平均を3%上回る。無回答を0に近づける。	B	B	B	基礎・基本の定着に向けて、テスト前の質問会や勉強会などで、学習を苦手とする生徒に学年で対応することができたが、勉強会については、各学年や教師間で温度差があり、対応方法に課題がみられた。家庭学習の充実に向けては、家庭学習状況調査結果による課題と家庭学習の方法等を家庭に発信し、協力を求めた。また全国学力・学習状況調査結果の平均正答率は、国語で全国より-3.8%、奈良県より-1.6%、数学で全国より-2.6%、奈良県より-1.6%、英語の(聞・読・書)では全国より-0.6%、奈良県とは同値、(話す)では、全国より-2.4%という結果で3教科全ての結果が全国と奈良県より低い状況で、目標の平均正答率を上回ることができなかった。無回答率については、国語で10～20%、数学11～25%、英語で19～24%の状況である。	勉強会については、教員の人数を充実させ、“つまずきのある生徒をなんとかしたい”という共通の思いで、学習に不安を感じている生徒の“できないところを少しでもできるようにしていく”という教師側の姿勢統制をして、生徒へは、“ここに来たらわかる、先生に教えてもらえる、来てよかった”といった思いを持たせることから、学習意欲にもつなげていきたい。また、状況調査の結果を受けて、各教科の苦手分野の課題についても、教材を模索しながら引き続き取り組んでいきたい。無回答率の改善対策としては、無回答で多かった分野の問題を早期に対応していきたい。	入試制度の変化への対応等、ご苦勞をかけるがよろしくお願いいたします。

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策 ・ 評価指標	評 価			成 果 と 課 題 (評価の分析)	課 題 の 改 善 策 等	学校関係者評価
学力の向上 基礎・基本 の定着	学習集団づくり について規律ある 学習態度を身に 付けさせる。	○ 生徒が落ち着いた雰囲気で、時間概念を意識した、けじめのある学習態度で取り組めるようにする。 ● 授業状況調査結果において「授業は、対話的に学び合う活動以外は、落ち着いた雰囲気で進められている」の回答を肯定的な回答内（数値2未満）をめざす。	B	B	B	学習・生活の規律や環境、校内共通の統制構築が定着し、チャイム前に着席して授業に臨める状況である。また、授業状況調査の「授業は、落ち着いた雰囲気で進められている」項目においての肯定的な回答の平均数値は、第1回が1.4、第2回が1.5で、肯定的な回答（数値2未満）に到達できた。一方で数値2を超えている教科が若干あることが気になるところである。	落ち着いた雰囲気の中で、学校生活や学習活動への取り組みの習慣化を継続しつつ、授業状況調査結果で明らかになった本校における課題については、教員個々が意識を持って改善に取り組む必要がある。さらに、生徒自身が見通しを立てて、意欲的に取り組める授業改善に取り組む、学習成果の向上と質の向上に努めていく。	生徒たちは非常に落ち着いた雰囲気の中で学習できている様子が見られる。今後も維持してほしい。
	授業構成について授業者が学習の見通しを持って授業を受けさせている。	○ 授業はシラバスに沿って進められ、授業のはじめに、提示された学習の「目標・めあて」を生徒は理解し、授業の終わりに、生徒が個々に学習の「振り返り」を行い、生徒が見通しを持って授業を受けられるようにする。 ● 授業状況調査結果において、教科担当者が「毎時間の授業のはじめに、その時間で学習する”めあて(目標)”が示されていて、その内容について説明がされている」「毎時間の授業の終わりに、時間を確保して個々に学習の”振り返り”を行う活動がある」の回答を肯定的な回答内（数値2未満）をめざす。	B	B	B	各教科とも授業のシラバスに沿って授業が進められ、9割の教科で目標進度を達成できている。また、授業改善に向けて授業状況調査を2回実施して、改善状況の確認を行っている。「めあて」に関しては、1回目と2回目ともに数値は1.2で数値目標を達成できており、定着していることが伺える。「振り返り」に関しては、1回目は1.3、2回目は1.4で、こちらも数値目標を達成できていて、概ね定着が見られるが、一方で数値2を超えている教員が若干いる状況であり、全教科の定着には至っていない。「振り返り」については、教科の評価における観点材料としている傾向があり、定着をめざしたいところである。	シラバスは全教科統一形式で、HPに掲載して生徒へ学習の際には確認するように促しているが、学校生活状況調査では平均閲覧率の数値は3.1（1に近いほど肯定的な回答）で、ほとんどの生徒が見ていないことが伺える。今後は各教科で見通しを立てた取り組みを継続しながら、定期的にシラバスの確認を促していく。また、授業構成の改善については、研修や個人面談等で、教職員に意識付けを行い、生徒にしっかり伝わる方法で「めあて」を提示し、授業の中に「振り返り」を行う時間を完全に組み込んで行っていく。そして「振り返り」の内容を、全教科の観点の評価材料として取り入れていく方向性をめざしたい。	授業時、「めあての提示」と「振り返り」を実施しているが、それ以外にもあらゆる視点から学力向上を目指してほしい。
心の教育の 充実	あいさつ運動を 推し進め規律と 活気のある生徒 の育成を図る。	○ 生活委員を中心に月に2回のあいさつ運動を行い、学校内だけでなく地域でも元よくあいさつができる生徒を育成する。 ● 学校評価アンケート（生徒・保護者・教員）結果において「すすんであいさつするよう心がけている」の肯定的な回答90%以上をめざす。	A	A	B	回数を重ねるごとにあいさつ運動に参加する生徒も増え、しっかり挨拶もできた。学年を越えて委員会として活動ができた。校内での挨拶はできたが、外部から来られる方にも積極的に挨拶していきたい。ここ数年のデータを見ると、すすんで挨拶を心がけている生徒が令和3年度の89%から今年度の83%と下がっている。同時に教師の意識にも課題があると思われるので、意識改革を心がけたい。	次年度以降は、生徒たちと活動の方針について話し合い、委員会としてのあり方を検討していきたいと思う。学校に来にくい生徒も登校しやすい雰囲気や活動を目指していきたいと思う。同時に、自分からすすんで挨拶ができるように挨拶運動に参加しやすいようなスタンプカードなどを作成し、意識改革を行っていく。	挨拶はコミュニケーションの第一歩であるので、今後もその伝統を受け継いでほしい。
		○ 規範意識を高め、TPOを考えた言動をとれる生徒の育成を図る。日常から各学級において規範意識を高める説諭を行い、集会時には生徒指導主事から規範意識を高める説諭を行う。 ● 学校評価アンケート（生徒・保護者・教員）結果において「社会規範（ルール）やマナーが身につけている」の回答を90%以上をめざす。	B	B		発達支持型生徒指導、課題早期発見型生徒指導の観点から、各学級朝の会や終礼において、学級担任から規範意識を向上させる説諭を行った。全校集会の際には、生徒指導主事から規範意識を向上させる説諭を行った。また、学校評価アンケートにおける「社会規範(ルール)やマナーが身につけている」の回答は、生徒が88%、保護者は87%であった。指標の数値に近い状況ではあるが、もう少し規範意識の向上を図りたいところである。	来年度も様々な場面を捉えて、生徒指導主事や担任から生徒の規範意識を高める説諭をしていく。また、交通安全教室や防犯教室、ネットスマホ講演会等、外部の講師にも来校してもらい、生徒の規範意識の向上を目指す。	生徒たちは非常に落ち着いた雰囲気の中で学習できている様子が見られる。今後も維持してほしい。

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策 ・ 評価指標	評 価			成果と課題（評価の分析）	課題の改善策等	学校関係者評価
心の教育の 充実	丁寧な言葉遣い ができる生徒を 育てる。	○ 学校の教育活動全般を通じて「場」に応じた言葉遣いについて考えさせるとともに正しい言葉遣いができるよう指導を行う。例えば、道徳の授業で礼儀の意義を考える。 また、日常から、教師が距離感を意識して生徒と接する。 ● 学校評価アンケート（生徒・保護者・教員）結果において、「場に応じた正しい言葉遣いができている」の肯定的な回答80%以上をめざす。	B	B	B	道徳の授業の他、教育活動全般を通して礼儀や言葉遣いについて考えさせた。肯定的な回答は、生徒・保護者ともに83%と概ね良好な状況である。 ただし、教員においては、肯定的な回答は58%にとどまっており、前年度よりも低下している。このことから、生徒や保護者が正しい言葉遣いをすべきだと認識している「対象」や「場」と、教師が正しい言葉遣いをすべきだと考えている「対象」や「場」に相違があること、さらには、教師間でも認識に差があることがわかった。	「場」に応じた言葉遣いは短期間で身に付くものではないので、長期的な視点で、継続的に指導にあたる必要がある。また、「場」の認識に相違のある現状においては、どのような「場」において、どのような言葉遣いをすべきかということ、生徒により具体的に示していくことが求められる。よって、今後は具体的かつ継続的な指導を行うために、教師間で共通理解を図り、共通認識に基づいて指導にあたれるようにしていく必要がある。例えば、職員室の入室のあいさつや、教師への声かけの仕方については一定のルールに基づき、できていなければやり直しをさせるなどすることが考えられる。	教員に対する生徒の言葉遣いがぞんざいになっている場面があるように感じる。必要に応じて適切に指導をお願いします。
	自尊感情の高い 生徒を育てる。	○ 互いの素晴らしいところ、見習いたいところ、頑張っているところ等を褒めあう活動を展開する。例えば、学活において「いいところ探し」のような認め合いの活動を行う。 ● 学校評価アンケート（生徒）結果において「自分のいいところを認めてくれる友達がいる」の回答90%以上をめざす。	A	A	B	学活、道徳における仲間作りや、互いを認め合う学習、部活動などを通して、仲間のよいところを認め合う雰囲気醸成することができた。生徒のアンケートにおいて、肯定的な回答が94%であったことから、様々な取り組みが、一定の効果をあげていることがわかった。	本年度の取り組みが一定の成果をあげていることから、同様の取り組みを継続していく。ただし、少数ながら否定的な回答をした生徒がいることは看過できない生徒の抱える背景にも注視しながら、様々な取り組みを進めていく。	生徒が達成感を味わえるような学習活動をして、自尊感情を持たせてほしい。
	生徒理解を活かした教育の推進を図る。	○ 生徒が生き生きと学校生活を送れる学校をめざす。学校行事等を生徒主体として創り上げ、生徒に達成感を持たせる。 ● 学校評価アンケート（生徒）結果において「楽しく学校に通っている」という回答を90%以上をめざす。	B	B		各委員会、生徒会本部主体で文化祭や体育大会を運営することができた。行事前には、事前に集まりスローガン決定などにも力を入れた。生徒のアンケートにおいて肯定的な回答が89%であったことから、様々な取り組みが、一定の効果をあげていることがわかった。	一定数否定的な回答をしている生徒もいるため、主体的に活動する中で様々な感じ方をする仲間がいることにも注目させ、学校全体が達成感を味わえるようにアイデアを提案する。	様々な行事が縮小傾向にあるが、今後も生徒の心を耕す取組を工夫して行っていきたい。
生徒会活動の 充実	生徒会活動のより一層の充実を図る。	○ 委員会活動を活性化し、4月に1年間の計画を立て、その計画に基づいて生徒が責任を持って活動できるようにする。 ● 学校評価アンケート（生徒）結果において「係や委員などの生徒会活動に関心を持ち、積極的に参加している」という回答を90%以上をめざす。	B	B	B	コロナ禍前の取り組みに戻ってきている。行事も換気などに気をつけてほぼ制限なく実施することができた。学校評価アンケートの結果は生徒が69%、保護者が69%、教員が76%で、90%には届かないという結果であった。	来年度も、コロナ前に戻すだけでなくよりよい活動を模索しながらやっていきたい。さらに、その中で生徒主体となる活動を取り入れる。また、各委員会との連携を図り、全ての委員会が活発に活動を行えるようにすることで、生徒会活動への関心・意欲を高める。	生徒がリーダー性を発揮できるような生徒会活動を行ってほしい。

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策 ・ 評価指標	評 価			成 果 と 課 題 (評価の分析)	課 題 の 改 善 策 等	学校関係者評価
健康・体力・安全の充実	体育指導の改善を図り、生徒の体力向上をめざす。	○ 体力テストの課題分析を行い、斑鳩中学校体力向上計画を立て、運動することの楽しさや、生徒の体力向上をめざす。 ● 持久走については、男子－15秒、女子－10秒、長座体前屈については学校全体で＋5 c m、握力については男子＋5kg、女子＋2kgを目標に体育の授業を取り組む。また、第1学年については基礎体力向上のため、毎時の授業で様々なトレーニングを取り入れる。	B	B	B	今年度は全体的に男女ともに県平均と近い数値となっている。また1年生女子ハンドボール投げは全国平均を上回る数値となっている。 持久走については2年生男子、3年生女子は全国平均よりかなり下回っているが、そのほかについては全国平均に近い数値となっている。	今年度も12月～1月にかけて持久走を行い、初回授業と最終授業での記録を比較すると、ほぼ全員の生徒たちに記録の向上が見られた。体育の時間に補強運動も毎時間行い、俊敏性や筋力なども上げていく。毎時間、授業前にグラウンドであれば1周、体育館は3週のランニングを行い、ウォーミングアップも兼ねて、走る習慣をつけていく。個人で目標を持たせるようにし、少しでも「できるようになった」「上達した」という達成感を感じられるようにする。	最大限の体力向上が行えるよう工夫していただきたい。
	食育のより一層の充実を図る。	○ 成長期の自分の適正量を知るためにも、配られた給食を「つぎき」を学級に定着させる。年に2回の栄養調査を実施し、残食率を分析する。 ● 給食の残食率を、前年度より、少なくする。特に、主食の残食率を前回の調査11月の8%から5%未満を目指す。	B	B		年に2回の栄養調査を実施できた。調査の結果、主食の残食率は、6月5.5%、11月は2.48%だった。昨年度の8%からは大幅に減少し、目標が達成できた。その他の主菜や副菜は残食は少ないが、副菜の食べ慣れていないメニューは残りやすい。また牛乳は冬になるとよく残ってしまうことが課題である。	教室での「つぎき」配膳を目指し、よく食べるよう継続した声かけの成果があった。また、特に今年の1年生の残食は少ない。来年度は、グループで食べたり、喫食前に量を調整できるようにしていき、おいしく食べる雰囲気大切にしていきたい。	食や睡眠は心身の健全な発育の根幹であるので、大切に取り組んでほしい。
	安全教育を推進し、『安心・安全な学校』をめざす。	○ 安全教育を推進し、年間2回の防災訓練を行う。自然災害から身を守る知識や災害に適切に対応する能力を培う。また、事後学習として直近に発生した震災について学習する。 ○ 震災の日に合わせて、朝の学活を使い注意喚起を行うとともに、震災に関する知識を深める。 ● 避難訓練における避難行動開始から全員避難するまでの時間を3分以内にする。	A	A	A	避難訓練を実施したことで、生徒の「減災」に対する意識や「自然災害」の知識だけでなく、適切な行動の理解を深められた。1学期に行った地震による火災の避難訓練では3分43秒で目標の3分よりも時間がかかってしまったことが少し課題である。2学期に行った不審者対応の避難訓練では「不審者が来た時の暗号」や「バリケードの作成の仕方」などを理解させ、自分の命を守る行動が大切だということを伝えている。	避難訓練を実施する際に、学級担任だけでなく、避難させる教師の緊張感を生徒に伝える必要がある。生徒の訓練で終わるのではなく、教師の訓練という意識を持ち進めていく。夏休みの研修などを通して、不審者対応などの研修を行って、子どもが安全に過ごせる学校作りを目指していきたい。	災害は、いつでも自分の身に起こりえるものであるという認識を、生徒にも教員にも持って防災、減災に取り組んでもらいたい。
	いじめの早期発見・早期対応に努め、生徒が安心して登校し、充実した学校生活が送れるようにする。	○ いじめに関するアンケートや教育相談、日々の生徒観察を通じて、いじめの早期発見、早期対応に努める。 ● いじめの重大事象「0」をめざす。 ● いじめの解消率「100%」をめざす。	A	A		6月と11月に教育相談週間を設け、担任との二者懇談を行った。また、7月と11月にいじめアンケートを実施し、合計8件のいじめ事象があったが、重大事象は0であり、その後の取り組みにより、すべて解消された。しかし、いじめアンケートで発覚した事象も多数あったため、日々の生徒観察を通して、早期発見、早期対応に努めていく。	来年度も6月と11月の2回、教育相談週間を設け、二者面談を行う中で、いじめ事象や人間関係トラブルの早期発見、早期対応を行う。また、いじめアンケートも2回実施、早期発見と3ヶ月後の追跡調査を行う。	報道等見ていると、ほとんどのいじめ重大事象にSNSの誤った利用が関わっている。ネットリテラシーの取組を今後も継続してほしい。

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策 ・ 評価指標	評 価			成果と課題（評価の分析）	課題の改善策等	学校関係者評価
特別支援教育の充実	特別支援教育に対する理解を深める。	○ 特別支援教育コーディネーターを中心に支援委員会（ケース会議）を定期的に開催し、個々の生徒の情報を共有し、実態に応じた支援を全職員に周知する。 ● 特別支援アンケート結果において、4段階評価平均数値3以上をめざす。	A	A	A	個々の生徒の支援については、全職員で情報を共有しながら対応することができた。また、特別支援アンケート結果の平均数値は3.5（4に近いほど肯定的な回答）で、目標としていた平均数値3.0を達成することができた。自立活動の内容については再考し、卒業後を見通した内容を考えていく必要がある。	個々の生徒に対する支援の在り方については、特別支援担当教員を中心に年度当初に検討し、学校全体で共有できるように徹底し、指導に差が出ないようにする。また、評価アンケートで「自立活動の充実」という項目が3.1と比較的低かったので、進路学習や社会体験活動などを取り入れることも検討しながら、きめ細やかな支援をしていけるようにしたい。	今後も個の特性に応じたきめの細かな対応をしてほしい。
家庭・地域との連携	学校と家庭・地域が連携する体制の構築をめざす。	○ 学校通信「斑鳩の道」や学年通信、HP等をICTサポーターを活用して、学校の様子について伝える。 ● 学校評価アンケート（保護者）「各種たよりや電子メール、ホームページ等で、情報を積極的に発信している」の項目において90%以上の肯定的な回答をめざす。	B	B	B	「斑鳩の道」を発行し、折々の行事や調査結果等を発信した。必要に応じて、連絡事項や不審者情報をメール配信した。学校評価アンケート（保護者）「各種たよりや電子メール、ホームページ等で、情報を積極的に発信している」の項目において、昨年度は肯定的な回答が79%であったが、今年度は78%となった。	HPについて、現在使用しているKC NのHPから、今後は斑鳩町内の学校全てがG o o g l eを用いたHP管理に変わっていく方向であるので、利便性や魅力をさらに高めることで、頻繁に見てもらえるような工夫を行う。	今後も様々な機会を捉えて情報発信し、開かれた学校の構築に努めてほしい。
		○ 生徒が地域に貢献できる活動を行う。 ● 藤ノ木古墳周辺の清掃やクリーン活動への参加を充実させる。 ● 学校評価アンケート（生徒）「地域の行事等に積極的に参加している」の項目において50%以上の肯定的な回答をめざす。	B	B		2年生において、地域清掃ボランティア団体の協力を得る形でのクリーン活動を実施した。学校評価アンケート（生徒）「地域の行事等に積極的に参加している」の項目においては、肯定的な回答が昨年度は36%であったが、今年度は32%となった。	左記のような取組を通して、生徒達の大きな励みと自信につながったが、肯定的な回答が4%ダウンしている。取り組みの工夫を行うことで、地域貢献の動機付けを図りつつ、家庭にも協力を仰ぐ。	地域と連携することで教育の可能性を広げていってもらいたい。
教員の育成	教員の指導力を向上させ、授業力の高い教員を育成する。	○ 授業研究を中心とした校内研修を実施して、研究討議を通じて自らの授業改善を図り、授業力の向上を図る。 ● 授業状況調査の結果において、各項目のレーダーチャート4段階評価（1, 2, 3, 4の順）の回答平均数値を肯定的な回答内（数値2未満）をめざす。	B	B	B	授業研究については、指導主事来校の上、実施することができた。授業状況調査については、殆どの項目で平均数値が1.5以下の肯定的な回答を得ることができた。平均数値が1.5を超える項目で「授業で対話的に学び合う活動がある」については、数値2.5を超える教員も見られ、積極的に対話的活動を取り入れていないことも想定され、今後改善が必要である。	授業状況調査の結果において、教科内におけるバラツキを解消していく必要がある。次年度は、「対話的に学び合う活動」から深い学びにつなげていくことに主眼を置き、各教科で統制のとれた授業の展開をしていく。また、経年比較から、平均数値が2に近い教科担当者には、個人面談を行い、その中で要因を確認し、助言を行い、改善につなげていく。	今後も研究、研修を深め、その成果を生徒に返していったほしい。
	ICTを活用した教育の推進をめざす	○ ICT教育推進リーダーを中心に、スキル向上（情報モラルを含む）や利活用の工夫についての研修会を行う。 ● 職員が電子黒板・プロジェクター等のICT機器の操作技術を身に付け、授業における利活用を促進する。	B	B		研修会に関しては、全体での活動を計画、実施することができなかった。しかし、各教科・各学年でICT機器を活用した授業が大半で、ICTサポーターや教員間の情報共有により利用率、操作技術は向上している。また、職員間の連絡事項も各々の端末で共有する形式となったことで打ち合わせ時間の削減に繋がり、生徒と接する時間が増加した。	ICTの活用が進む中、教員個人のスキルや積極性の違いも見られる。教科等の小規模な単位での意見交換や、利用例や教材活用法の交流を持てるようにしていく。また、機器の故障やネットワーク環境の不安定さによる利用しづらさも増加しているので、授業に不都合が無いよう環境を整えていく。	ICTを使った方が教育効果が上がることと、従来のアナログな方法の方が教育効果が上がることを見極め、取り組んでほしい。

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策 ・ 評価指標	評 価			成 果 と 課 題 (評価の分析)	課 題 の 改 善 策 等	学校関係者評価
業務改善	不登校(傾向にある)生徒が学校へ登校できたり、理由があって授業へ参加できない生徒の居場所となる環境をつくる	○ 校内適応教室(ステップルーム)を継続的に運営する。 ● 不登校(傾向にある)の生徒が1人でも多く、ステップルームを通じて登校できることをめざす。 ● 教室での授業参加が難しい生徒にとって、ステップルームが一時的に落ち着ける居場所となり、少しずつ教室で受けることができる授業が増えることをめざす。	B	B	B	不登校対策委員会を毎月開き、S S WやS Cの専門的な見地からのアドバイスを得ながら個別の対応に努め、少しずつ登校を再開できた生徒もいる。登校再開にまで至らないケースにおいても、S Cを受けることで自身の心を整理し、再登校に向けた足がかりとなっている生徒もいる。また、不登校生徒の学習意欲や部活動への興味関心に対しても学年によらず全職員で体制を整え、可能な範囲で対応し、登校へつながるよう配慮した。教室での授業参加までに至らなくても、これからも個々の事情に合わせた対応を行っていきたい。	担任だけでなく、学年主任をはじめ学年教員、養護、S C等、不登校傾向にある生徒に対応できるチャンネルを多く持つ。また、引き続き不登校対策委員会を持ち、不登校生徒に関わる内容を全体で共有し、専門家の見立てを得ながら、一人でも多くの不登校生徒が登校できることを目指していく。担当学年にとらわれず、部活動等を通じ様々な職員が不登校生徒に関わりを持つことのできる体制を維持し、必要に応じ外部機関とも連携して対応にあたる。	不登校生徒について、斑鳩町の施設(くるむ)を今後も有効活用してほしい。
	教職員の働き方に対する意識改革を行う。	○ 出退勤記録システムを利用して、出退勤の時刻を管理し、職員の健康状況を把握する。 ○ 業務改善のために勤務時間短縮の工夫をする。 ● 職員1人の時間外労働を月合計60時間以内かつ年間合計360時間以内を達成している職員が全体の70%以上をめざす。	B	B		1ヶ月の時間外労働の平均が60時間以内である職員は、昨年度は全体の74%であったが、今年度は、全体の89%となり、15%アップした。しかし、年間合計360時間以内の職員は昨年度全体の41%であったが、今年度は37%となり、4%のダウンとなった。	左記数値より、スムーズに業務を終えて退勤できる時は退勤するスタイルが定着する一方、生徒指導、成績処理、進路指導等、突発的もしくは時期的に時間外労働が必要となる業務のために依然年間の時間合計が高まる傾向が見受けられる。数値目標の達成には至っていないが、各校務分掌を中心に学校行事や業務内容の見直しを今後も進めることで、目標数値の達成を目指す。	教員の働き方改革について、部活動の改革が大きなポイントのひとつである。地域移行に向けて取り組んでもらいたい。